

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 3 日現在

機関番号：43502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380259

研究課題名(和文) 初期近代イギリスにおける信用の制度化をめぐる議論とその論争点

研究課題名(英文) The debate on the institutionalization of credit in early modern England and its issues

研究代表者

伊藤 誠一郎 (Ito, Seiichiro)

大月短期大学・経済科・教授(移行)

研究者番号：20255582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：17世紀のイングランドにおける、銀行、土地登記、利子率に関する議論を信用制度の「基金」の安定性という視点からまとめた。また、その過程で、この時期、とくに17世紀前半のパンフレッティアーが常にオランダをモデルとしていること、なかでも漁業を経済の原動力と考えていることを見だし、いずれも論文としてまとめた。また、こうしたなか、これらの問題を英文の著書としてまとめることにし、英文での企画書をまとめた。

研究成果の概要(英文)：I wrote a paper about the discussions in seventeenth century England concerning banking, registration of estates, interest rates in terms of certain fund of credit institution. In this research I found that the English pamphleteers in this age, particularly the first half of the seventeenth century, regarded Holland as their model society and, above all, saw fishery as the driving force of the Dutch economy. I also wrote a paper about this. In the course of this research I realised the necessity of writing an English book on these subjects and I wrote a book proposal in English.

研究分野：経済思想史

キーワード：17世紀 イングランド 銀行 思想史

1. 研究開始当初の背景

これまで 17 世紀のイングランドにおける貨幣不足の問題を、名誉や評判という道徳・社会的要素にもとづいた脆弱な信用関係の中で人々がどのようにこの問題を解決し、信用をより強固な基盤の上に成り立つ制度としていこうとしていたかという点に焦点をあて、諸銀行設立案、土地登記制度という論点をめぐる論争の検討を通じてみてきた。また、英文学術専門誌にもその成果の一部を掲載してきた。しかし、そのなかで、この制度的信用の形成という問題が、当時のイギリス人がオランダをモデル社会としてそれを真似ようとする議論の一部として論じられることを見いだした。

2. 研究の目的

□上記の研究をもとに、この時期の信用制度、とくに銀行設立をめぐる議論における本質的な争点、議論のあらゆる場面において、健全な「基金」であったことを明確にする論文を作成にする。□当時イングランドで多く書かれたオランダ経済・国家に関するパフレットのさらなる吟味を通じて、諸論者たちがオランダのどの点を見習うべきと考え、どの点を敵対視していったかについてよりはっきりさせるとともに、1670 年頃のチャイルドに代表される論争的態度と、1690 年代にめだつた“科学的”態度の違いの内容を明確にする。□1696 年以降にまで及ぶ土地銀行論争が、これまで言われてきたようなウィッグ＝イングランド銀行対トーリー＝土地銀行という政治図式だけに還元されるものではなく、より安定した「担保」や「基金」を求めた論争の延長線上の議論として本質的には捉えられるべきだということを明らかにする。□イングランド銀行支持者と土地銀行提唱者たちの間での激しい応酬がこのような信用の基金の安定性をめぐるものであったことを、1695 年頃から大改鑄や財政の問題を論じていたチャールズ・ダヴナントの議論を通じて確認する。

3. 研究の方法

おもに英国の大英図書館、各大学図書館、公立資料館などを中心に、17 世紀の刊行物や手稿類を収集・調査し、おもに英文論文としてまとめ、ヨーロッパ経済思想史学会やオーストラリア経済思想史学会など英語での学術報告を行い、その後さらに論文の完成度をたかめ、英文学術雑誌の掲載を目標として投稿する。

4. 研究成果

5 で示した論文等の形で、17 世紀イングランドの経済に関する議論を、信用制度と基金、利子率論争、漁業と経済の論争という視点からまとめた。しかし、この過程でこれをイングランド人パンフレティーアによるオランダ・モデル論として著作にまとめることによってこそ適切に表現できると思うに至り、

とくに 27 年度は英文著作のプロポーザルの作成に集中した。

25 年度には、5 月の経済学史学会において、「17 世紀イングランドにおける信用と基金」というタイトルで報告し、これをもとに改良したものは 26 年度中に共著の一部として刊行された。また 20 年にオーストラリア経済思想史学会で報告した原稿の改良版を 'Interest controversy in its context' として英文専門誌 The Historical Journal に投稿した。結果は不掲載であったが、二人のレフェリーから論文の質は高く評価されており、問題点はこの論文の意図の特徴をもっと明確にすべきこととされていた。この論考で私が言おうとしたのは、17 世紀半ばの利子率論争は、オランダの低利子率は経済の繁栄の結果が原因かが論点だったのではなく、数多くあるオランダの優位点からなにを学ぶべきかにあったということであった。まさにこれこそ、17 世紀初頭からイングランドで盛んに議論された、漁業のメリットをめぐる議論のなかに見られた論点であり、これについて早速調べ 10 月に社会思想史学会で「イングランドはオランダから何を学ぼうとしたか？」というタイトルのもと報告し、これをさらに展開した英文論文を 2 本に分けて作成し、'What should the English learn from the Dutch?' および 'Neighbour country, Holland: and ideal model to follow, or just an enemy?' として、ヨーロッパおよびオーストラリアの経済思想史学会で翌、翌々年に報告した。前者では 17 初頭のニシン漁をめぐる議論について、後者では、このニシン漁から得られるメリットからさらにすすんでオランダ社会全体からなにを学ぶべきかという議論に広がっていったことを示した。こうした研究の展開のなかで、オランダ・モデルからイングランドはなにを学ぼうとしたかというテーマのもと英文の単行本を書くことにし、上記のように企画書をまとめ、26 年のロンドンでのヨーロッパ経済思想史学会で英国の出版社に相談をし、そのアドバイスのもと改訂した企画書を翌年のヨーロッパ思想史学会でこのことについて相談をしたダブリン大学トリニティ・カレッジのアントワン・マーフィ教授に読んでいただき、教授からのアドバイスのもとさらに改訂したものを 28 年 3 月のポリティカル・エコノミー・セミナーで、'Institutionalising English economy: four controversies over the Dutch model' として報告した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

・ 'Registration and credit in seventeenth-century England', pp. 137-162,

Financial History Review, vol. 20:2, 2013, August.

・「水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』における credit の訳語について」『アダム・スミスの会会報』No. 82, pp. 1-7, 2015 年 3 月。
〔学会発表〕(計 10 件)

・‘What was the issue in the land-bank controversy?’, The 17th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Kingston University London, United Kingdom, 2013 年 5 月 17 日。

・セッション「初期近代グレート・ブリテンにおける信用の制度化をめぐる諸議論」(組織者 伊藤誠一郎)「17 世紀イングランドにおける信用と基金」経済学史学会第 77 回全国大会、関西大学、2013 年 5 月 26 日。

・「イングランドはオランダからなにを学ぼうとしたか?」(セッション「啓蒙・郷土愛・国民国家 コスモポリタニズム・共和主義・ナショナリズム」)第 38 回社会思想史学会大会、関西学院大学、2013 年 10 月 26 日。

・「鈴木康治 『消費の自由と社会秩序 18 世紀イギリス経済思想の展開における消費者概念の形成』」現代経済思想研究会(第 14 回)、東洋大学、2013 年 6 月 1 日。

・「J.G.A.ポークック著、犬塚元監訳『島々の発見 「新しいブリテン史」と政治思想』」経済理論史研究会、東洋大学、2014 年 1 月 25 日。

・「水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』における credit の訳語について」アダム・スミスの会第一九一回例会、東京ガーデンパレス、2014 年 5 月 10 日。

・‘What should the English learn from the Dutch?’, The 18th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Université de Lausanne, Centre Walras-Pareto, Lausanne, Switzerland, 2014 年 5 月 29 日。

・‘A neighbour country, Holland: an ideal model to follow, or just an enemy?’, The 19th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Roma Tre University, Rome, Italy, 2015 年 5 月 16 日。

・‘Land-bank projects after the establishment of the Bank of England’, 4th ESHET-JSHET joint conference, Otaru University of Commerce, Otaru, Japan, 2015 年 9 月 11 日。

・‘Institutionalising English economy: four controversies over the Dutch model’, ポリティカル・エコノミー研究会、東京大学本郷キャンパス、2016 年 3 月 24 日。

〔図書〕(計 2 件)

・「一七世紀イングランドのトレイド論争 オランダへの嫉妬、憧れ、警戒」田中秀夫編『野蛮と啓蒙 経済思想史からの接近』京都大学学術出版会、pp. 79-100, 2014 年 3 月。

・「17 世紀イングランドにおける信用と基金」坂本達哉・長尾伸一編『徳・商業・文明社会』京都大学学術出版会、pp. 33-58, 2015 年 3 月 31 日。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤誠一郎 (ITO, Seiichiro)
大月短期大学・経済科・教授
研究者番号：20255582

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()